

Title	「痴漢」の変容：中国から日本への伝播と定着
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	日本語・日本文化. 2014, 41, p. 1-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50757
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「痴漢」の変容——中国から日本への伝播と定着

岩井 茂樹

現在の日本で「痴漢」という語は、おおよそ次のような意味で理解されているのではないだろうか。「女性に性的ないやがらせをするいやらしい男」というように。

しかしながら、辞書を引いてみるとすぐにわかるように、「痴漢」には二つの意味がある。一つは「おろかな男」という意味。もう一つは「女性にみだらないたずらをする男」という意味、である。これについてはすでに、井上章一ら先学諸氏による指摘がある。つまり、現在では「女性にみだらないたずらをする男」として解される「痴漢」は、本来「おろかな男」という意味だったと言うのである。井上は意味の指摘だけにとどまらず、次のような指摘も行っている。

性的な意味のない、ただのおろかものとしても、この言葉を使う。そう解説してくれる辞典もなかにはある。(中略)

現代人の語感に、この説明はあまりなじむまい。ばかなやつという意味で、誰かを痴漢よばわりすることも、今ではないだろう。

しかし、かつては、そちらの意味でもこの言葉をつかっていた。いや、むしろそのほうがふつうであったと思

う。「痴愚」^{ちぐ}「痴呆」^{ちほう}「痴鈍」^{ちどん}などの「痴」に助平なニュアンスはない。「痴漢」もそれと同じで、もともとは好色な意味合いはふくんでいなかった。のみならず、現代中国でも、ただのおろかものとしてしか、この言葉は理解されていない。

痴漢に性的な気配がただよいだすのは、二十世紀以後の新しい現象である。そして、中国にはこの新しい用法が普及しなかった。それは日本でのみひろがった含意なのである。¹⁾

井上の言う通り、どの辞書を引いても「痴漢」の項には「おろかな男」と、「女性にみだらないたずらをする男」という二つの意味が載っている。現代中国では「おろかももの」の意味でしか使わないし、「痴漢」が性的な意味を帯びだすのは、二〇世紀の新しい現象だ、と井上は言うのである。

では、本来「おろかな男」私たちが現在使っているような「痴漢」の意味になったのは、二〇世紀のいつごろのことだろう。

この点に関して、原武史は「痴漢の発生」という文章の中で、「痴漢」の発生は一九五〇年代であるという見解を示している。

混雑した車内で立っている女性を狙う痴漢は、当時（大正末期―筆者注）はまだいなかった。いや、いたのかもしれないが、少なくとも目立ってはいなかった。（中略）

では、痴漢はいつごろから発生したのだろうか。どうやらこれは、戦後、しかも女性の服装が和服からモンペ、そして洋服へと変わり、女性がオフィスへと本格的に進出し始めた一九五〇年代に入って、明らかに目立ち始めたようだ。²⁾

原によると、大正末期、つまり一九二〇年代前半には「痴漢」はいたかもしれないが、目立つ存在ではなく、「痴漢」が発生したのは、日本で女性の洋装化が進んだ一九五〇年代以降のことだ、と言う。

たしかに、原の言うように、「女性にみだらないたずらをする男」という意味での「痴漢」が目立って論じられるようになるのは一九五〇年代以降のことである。けれども、それ以前にも「痴漢」はすでに存在した。ただ、当時はそうした男を必ずしも「痴漢」と呼ばなかっただけのことである。

いずれにせよ、「痴漢」の語義変化の過程や時期が明らかにならないと、性的なニュアンスを持つ「痴漢」がいつごろ発生したかを確定することは難しい。また語義変化のみならず、「痴漢」の読みや表記も時代によって変化する。小松奎文は、「痴漢」を「女に悪ふざけ・いたずらをする男。」というように定義し、その後「痴漢には女の体に直接痴態行為をするタイプと露出狂的なタイプがある」とした上で、語義と表記の変化について次のような見通しを開陳している。

「痴漢」が上記のように性的悪戯の常習者の意味で広く使われ始めたのは比較的新しく、明治の頃までは主に「愚か者」とか「愚直な人」という意味で使われていた。大正・昭和には「痴漢」は軽犯罪的な行為ではなく、強姦魔というような意味で使われている。その時代を考えないと誤解が生じやすい。古い意味と区別するために「チカン」とカナ書きするケースも多い。³⁾

小松は「大正・昭和」には「痴漢」は「強姦魔」というような意味で使われており、したがって「その時代を考えないと誤解が生じやすい」という指摘を行っている。古い意味と区別するために「チカン」とカナ書きするケースも多い、ということも合わせて述べている。小松はそうした指摘をしながらも、それらの変化が起こった明確な年代や用例については一切示していない。それは致し方ないこととしても、小松の書き方は誤解を与える可能性がある。な

ぜなら、小松がいう大正、昭和期とは一九一〇年代から一九八〇年代までの約七〇年間という長い期間を指すからだ。小松の記述だと、その期間中、「痴漢」は常に「強姦魔」という意味で使われてきたと思われても仕方ないのである。カナ書きに関する記述にしても同じことが言える。いつの時点からカナ書きが増えてきたのか、この記述だけではわからない。

以上に述べた事例から、「痴漢」という語の語義、読み方、表記の変遷を明らかにすることが、「痴漢」に関する諸事項を考える上で重要な課題であり、「痴漢」を論じるための基礎作業となることが理解できるだろう。

本研究は、「痴漢」に関してより正確で具体的な知見を得ることを目的としたものであり、「痴漢」に関する語義変化の時期の確定と、読みや表記に関する変化について考察するものである。とりわけその第一弾となる本稿では、「痴漢」という語の由来、そして中国と日本の展開を中心に述べようと思う。対象とする時代は、明治時代より前の時代、つまり主に江戸時代を対象とする。その後の展開は、別稿『「痴漢」の文化史―「痴漢」から「チカン」へ』で論じた通りである。

なお、引用については、読みやすさを考慮し、旧漢字をできるだけ現代日本で通用している漢字に変更した。とりわけ「痴漢」という語については「癡漢」が本字であるが、本稿ではすべて「痴漢」に改めた。また判読が困難な場合は、句読点を適宜補った。

先行研究

「痴漢」に関する研究は三つに大別できる。

一つは、犯罪学からのアプローチである。「痴漢」を含む性犯罪がどうして起こるのかを主に犯罪心理学的な方法によって解明しようとするものである。ただし、こうしたアプローチは、その性格上、「痴漢」よりも罪の程度が重く、

また被害の度合いも大きいと思われる「強姦」などの凶悪犯罪に焦点と論点が集中してしまふ。その結果、それよりも罪の程度が軽いと思われる「痴漢」についての分析や考察が少なくなるというきらいがある。^⑤

二つ目のアプローチは、社会学的アプローチである。この中には、フェミニズム、ジェンダー、セクシュアリティ、メディア研究などが含まれる。この分野では対象とする社会問題として「痴漢」を捉えようとするため、必然的に「痴漢」の実態調査とその分析が主な課題となる。ここではアンケート調査や聞き取り調査が行われ、そのデータ収集と解析が主な作業になる。現在、全国各地の路線に導入されている「女性専用車両」に関する研究もここに含まれる。この分野ではある時点の状況はよくわかるのだが、いきおい歴史縦断的な視点というものが希薄となってしまいがちである。「痴漢」を例にとると、本来「おろかな男」という意味しかなかった「痴漢」が、いつごろ、どのようにして性的な意味を帯びるようになったのか、そこにどんな事件や社会的背景があったのか、そしてそれが現代にどう影響しているのか、といったような諸点にまで、まだ研究が及んでいないようである。^⑥

三つ目は法学からの研究である。ここでは「痴漢」をどのように裁くのか、あるいはどう裁いてきたのか、近年大きな問題となっている「痴漢冤罪事件」はどのようにして防げばいいのか、といった法律上の問題が議論や考察の対象となる。一般的に、法学は判例をもとに行われることが多い。したがって、どう裁かれたかという結果は追えるかもしれないが、その文化的背景に考察が及ぶことは、実際には稀である。^⑦

こうして従来研究を再検討してみると、どの分野においても「痴漢」に関する考察は行われているものの、それを言語や文化的な観点から通史的に考察しようとする試みはまったく行われていないということがわかる。

そうした中、研究とは言い切れないものの、瀬田英一『痴漢の生態とその防止法―他4編』^⑧は、語彙の変遷に始まり、痴漢の歴史など、広い視野から「痴漢」に注目している。先駆的な試みとしては高く評価できるものの、研究と言いつけるものとはなっておらず、内容も断片的で間接的な資料とデータに拠っているために、全体的に記述が曖昧であり、深い考察もなされていないというのが実情である。

他方、「痴漢」に関してはまとまった記述や論考などはまだ提出されていないが、現在、井上章一や関西性欲研究会などを中心とした「性欲文化史」もしくは「性欲文化研究」といった分野において、「性」に関するさまざまな事象が明らかにされつつある。『性の用語集』、『性的なことば』、『性欲の文化史』、『性欲の研究—エロティック・アジア』といった著作物は、その成果が結実したものである。

本研究は、瀬田や井上らの関心や問題意識と重なる点が多いが、全体的にそれらをより具体化し、深く考察したものである。

現代の辞書における意味

まずは現代の辞書に「痴漢」がどのように説明されているのかを再確認しておこう。『日本国語大辞典(第二版)』(小学館)には、「①愚かな男。ばかもの。たわけもの」、「②女性にみだらな行為をする男」という二つの意味が載っている。

①の用例から順に見ていこう。①の用例として早いものとして、七世紀頃の成立とされる中国の史書、『北史』(齊文宣紀)の「大帝笑曰、天下有如此痴漢(大帝笑いて曰く、天下に此の如き痴漢有やと—訓読筆者)」というのが見える。これによって、この語が中国由来であることがまずは確認できる。次に日本の作品における用例が示されている。この辞書におけるもっとも早い用例として、山東京伝の洒落本『繁千話』(一七九〇年)が、反対に時代が下るものとして、徳富蘆花の「思出の記」(一九〇〇—〇一年)が挙げられている。『繁千話』の用例は「調唇弄舌をまじえてちかんのごとくとりあつかふから、ぐっとかけだしさ」となっている。その他、江戸時代の用例として、湯浅忠良『広益熟字典』(一八七四年)の「痴漢 チカン バカナオトコ」と、『花柳春話』四六(一八七八—七九年)の「痴漢(チカン)・愚婦の間に一才子に逢ふは恰も砂漠の中に清水を得るが如し」という例が挙げられている。

一方、②では、三浦朱門の「セルロイドの塔」(一九五九年)の「よく週刊誌に中年の痴漢の話が出てくるが」という部分と、畑山博の「いつか汽笛を鳴らして」(一九七二年)の「近くに女性でもいて電車が少しでも混んでいるときは、それだけで痴漢に間違えられないかとびくびくしてしまう」という部分の二つが用例として挙げられている。

ここから「痴漢」に性的な意味が付与されるようになったのが、一九五九年以前のことだということがわかる。それに「セルロイドの塔」が発表された一九五九年当時の週刊誌などに中年の痴漢の話がよく出てくるらしい、ということも明らかだ。そして、「いつか汽笛を鳴らして」が発表された一九七二年頃には、「痴漢」と疑われることを恐れる男性の心理が描かれていることも注目しておいていだろう。

この辞書の用例からいくつかがわかったが、ここで注意しておかないといけないのは、本辞書で掲出されている用例が必ずしもその語の初出例とは言い切れないということである。すなわち①、②、ともにこの用例よりも前に使われていた可能性も十分考えられるのだ。

以下本稿では、①の用例について再検討してみたいと思う。

中国の「唐話」から

前項における辞書の用例(『北史』)からもわかるように、「痴漢」という語は、もとは中国で生まれた言葉、つまり漢語であった。意味も「おろかな男」というものだった。けれども中国においては書き言葉としてあまり使われなかった。というより、どうやら「唐話」であったようだ。「唐話」とは、「白話小説」などに使われる中国近世の俗語で、江戸時代に日本で受容された明・清時代の口語語彙を指す。この中に「痴漢」という語も含まれていた、と考えられるのである。

実例を挙げよう。たとえば、『水滸伝』の場合、第五、二四、二八、四三回に「痴漢」という語が見える(読みやすさ

を考慮して「痴漢」という語を太字にした。

- ・ 第五回、「智深大笑道『太公、你也是个痴漢、既然不両相情願、如何招贅做個女婿？』」
- ・ 第二四回、「王婆道『便是這般故事、自古駿馬卻馱痴漢走、美妻常伴拙夫眠。月下老偏這等配合』」
- ・ 第二八回、「兩边看的人都笑道『這痴漢弄死、且看他如何熬！』」
- ・ 第四三回、「看看自笑道『好痴漢、放著好肉在面前、卻不会吃』」

この他、管見に入つたものを、今後の参考のために表1にまとめた。なお、成立年などが不詳なものも多いので、現段階では年代順に列記するようなことはしていない。また、本来ならば、それぞれの書物の性質、文中の意味を吟味し、詳述すべきところであるが、紙幅の關係上、本稿ではそれを差し控えたい。いずれ、ここに列挙したものについては、稿を改めて詳しく論じることにする。

さて、表1から読み取れることを数点、以下に指摘していこうと思う。まず、「痴漢」という語は、史書、白話小説類、伝奇類、禅語録などに多く認められるということがわかる。いくつか同じ表現が用いられていたりして、他書と重複するものも見受けられる。その中には他書からの引用もあるだろうし、故事として用いられているものもあると思われる。

次に、「痴漢」という語のほとんどが会話文中で使用されていることがわかる。この特徴は『水滸伝』にも見られたものである。多くの書物で「笑曰」、「罵曰」、「曰」、「説」、「語」、「道」など、日本語で「言う」や「説く」という意味の語の後に始まる会話文中に「痴漢」が用いられているのである。地の文であることもあるが、それらは成句的なものか、歌謡の一部、回想の一部である。禅語録などの場合、その書物に書かれてあることの全部分が禅僧の話である場合が多いので、これらも口語的表現であると見なしていいだろう。

タイトルや本文中に「醒」、「夢」、「酔」、「希」といった語が目立つことや、「痴漢子」としての用例も少なくないこと、『水滸伝』と『東度記』（十大古典怪異小説ともいわれるもの）に用例が多いこと、「饒州人」、「西湖」などの

表1 中国における「痴漢」の用例一覧

書名	巻	回	用例
北史	7		帝大笑曰「天下有如此痴漢！方知龍逢、比干、非是俊物」遂解放之
	38		帝曰「痴漢何敢如此！」
旧五代史	119		世宗謂之曰「汝江南自以為唐之後、衣冠禮樂世無比、何故与寡人隔一帯水、更不禱一使奉書相問、惟泛海以通契丹、舍内事外、礼将在乎？今又聞汝以詞說寡人罷兵、是將寡人比六国時一群痴漢、何不知人之甚也！汝慎勿言、当速歸報汝主、令往來跪寡人兩拜、則無事矣。不然、則寡人須看金陵城、借府庫以犒軍、汝等得無悔乎！」
			世宗謂之曰「汝江南自以為唐之後、衣冠禮樂世無比、何故与寡人隔一帯水、更不禱一使奉書相問、惟泛海以通契丹、舍華事夷、例将在乎今又聞汝以詞說寡人罷兵、是將寡人比六国時一群痴漢！」
五代史補	5		世宗謂之曰「汝江南自以為唐之後、衣冠禮樂世無比、何故与寡人隔一帯水、更不禱一使奉書相問、惟泛海以通契丹、舍華事夷、例将在乎今又聞汝以詞說寡人罷兵、是將寡人比六国時一群痴漢！」
開元天宝遺事	1		○痴賢 右拾遺張方回、精神不爽、時人呼為「痴漢子」。每朝政有失、便抗疏論之、精彩昂然、進不懼死。明皇嘗謂「右拾遺張方回、忠賢人也」
高麗國本紀	8		蓮女而製進曰「這痴漢這痴漢、勿留聲勿留聲、此身便如蓮葉珠（後略）」
西陽雜俎・統集	4		帝大笑曰「天下有如此痴漢！方知龍逢、比干非是俊物」
金瓶梅	2		王婆道「便是這般故事、自古駿馬每駝痴漢走、美妻常伴拙夫眠。月下老偏這等配合」
西遊記	20		那歌子慌得跪下道「師父、你莫聽師兄之言、他有些臟埋人。我不会報怨甚的、他就說我報怨。我是个直腸的痴漢、我說道肚內餓了、好尋個人家化齋、他就罵我是恁家鬼。（後略）。」
			心自思道「這個痴漢、祇可以理騙、不可以力爭」
終須夢	16		卻說安童到黄昏時候、指望繡翠出來、直守到半夜時分、也不見個影兒、正合著痴漢等丫頭。安童一天歡喜
英雲夢伝	4		搖首道「這痴漢又来胡說了」
歴史通俗演義	86		慧兒不覺失声哭道「妾即謝度城之方女脚也、(中略)昔日之言俱驗、使子当日早從君言、嫁一村狂痴漢、可為有父兄、夫妻之樂、豈至飄泊東西、辱親虧体？老父弱弟相見何期？即此獻骸淪異地！」言罷、淚如雨注
古今奇観	10		痴漢猩猩揮不斷、鼻娘厭道了生眼
醒世姻縁伝	45		從來道「聰明才子無錢使、醜醜村夫有臭錢。駿馬每駝痴漢走、巧妻常伴拙夫眠」
西湖二集	16		方丈尽堪容六尺、笑他痴漢日怱怱
醉醒石	15		飛鴻道「你放心、有酒不飲是痴漢、有花不採是呆人」
一枕奇	4		也罷、朝廷在上、文武百官在前、自古道「饑人不痴、痴漢不饑人。」
三宝太監西洋記	13		這靈靈小姐、色雲双全的人、嫁了這般一個蠢物、真所謂駿馬常駝痴漢走、巧妻常伴拙夫眠也
韓湘子全伝	1		尊者說「我於未始有魔來已魔去。這痴漢徒自魔耳」
東坡記	7		婦人怒起、連叫了幾声丈夫、卻又指著漢子罵道「是哪裡無知惡少、不明道理村夫、不畏神明的痴漢、怎麼清平世界淫乱綱常。快走出林、莫討禍害。倘我丈夫醒來、斷不饒你！」
	40		乃笑道「這不中相交的痴漢子、待我要弄他一番」
	73		零埃等到黄昏、那女子說道「痴漢子、哪個沒有個廉恥、你必定要騙我、也有個房屋。且問你、可曾娶妻？」
	74		化善見了、笑道「痴漢子、你空費了精神、破了心術、怎能夠想得她子到手？」
	93		一齋掩口不住、笑道「好痴漢、那女子不知到什麼去處了、你兀自在這裡呆想、雲低日脯、速宜返舍！」
禪真後史	9		和氏眉頭一皺、歎道「駿馬每駝痴漢走、巧妻常伴拙夫眠。天下不平的很多」
海上塵天影	17		震震只得再想、笑道「下頭好似駿馬每駝痴漢走、巧妻常伴拙夫眠。再下頭宝在不知道了」
隋唐兩朝史伝	58		世續看罷大笑、秦王曰「元帥何故發笑？」。世續曰「吾非笑別、單笑敬德無謀、此事只瞞得無知痴漢、安能瞞我？」
九尾狐	46		阿金知道他的心事、便從旁勸道「大先生心急、愁也無買用格、隨便啥格事体、越緊末越慢、據我格意思、勿必日日去看啥格戲、落得省点、倒勿如多出幾個銅錢、叫個搭茶房去打聽、如果今朝戲館裡排出個格戲來、難未倪去看、省得像痴漢等老婆受棍、日日去階撞戲」
醒世恒言	37		不如將來娶壳、且作用度、省得靠著米囤卻餓死了。「這叫做杜子春三入長安、豈不是天生的一條痴漢！」
	39		若遇著肯舍的、便道是可擾之家、面前千般諂諛、不時去說騙「說遇著不肯舍的、就道是鄙吝之徒、背後百樣詆毀、走過去還要唾幾口涎沫。所以僧家再無個攀足之期。又有一等人、自己親族貧乏、尚不肯周濟分文、到得此輩募緣、偏肯整幾個佈施、豈不是舍本從末的痴漢！」

書名	卷	回	用例
伝燈錄	9		耽源曰「咄痴漢誰在井中」
西湖佳話	1		葛洪道「痴漢子、何必泣、我能為汝取出」、遂於井上、大呼「錢出來！錢出來！」只見那錢一一都從井內飛將出來、一個也不少。其人拜謝而去。
都是幻	5		一路上想到飲饌飽、不覺大笑「想到淒涼時、不覺大哭、路中見聞的、都道是一個痴漢」
濟公活仏伝奇録	10		又喜自高稱仏作祖、無人敢道自己是個瘋癲痴漢
驚夢啼	3		春桃道「我不笑別事、只笑這對門的和尚、在此化緣、不知何人與他開緣、豈不是痴漢等丫頭」
隔簾花影	34		看定十一月初三日成婚、招贅進門。那丹桂姐大病方好、看著候病子滿眼落淚。正是「好馬卻駝痴漢、拙夫偏遇佳人（後略）」
娛目醒心編	8		狂婦向丈夫道「痴漢子！保全得我、諸事替你出力、讓你日日吃酒、難道不好？明日多備幾壺酒、船上一路撞去、如何？」汪客聽見有酒吃、便点头道「說不得、我只得走一遭」
繡屏緣	11		雖然如此、但要郎情女意、兩辺認得真、縱使相隔天淵、也有乘槎会面之日「若是女子有情、那郎君只算得順丰采花的意思、丟了那個、又想別個。緣分順湊的還好、倘然有些隔礙、便要放下愁腸。李十郎之負心、黃衫俠客也看他不過。若是男子有心、那女人只有做痴漢等婆娘的模樣、可以嫁得、就隨了他。若還掣肘、不如隨風順舵」
禪真逸史	13		媚春道「好痴漢子、人命因天、豈同兒戲？你為恩人雪恨、殺他抵命、雖是丈夫氣概、少不得貽累我喫官司、好没分曉！凡事要慮始慮終、方纔行得、豈可如此燥暴。」
五雜俎	16		紹興末、朝士多饒州人。或謂之曰「諸公皆不是痴漢。」
	16		近時唐伯虎亦有詩云「駿馬每駝痴漢走、巧妻常伴拙夫眠。世間多少不平事、不会作天莫作天。」雖諷刺、亦有激之言也。
老学庵筆記	1		紹興末、朝士多饒州人。時人吾曰「諸公皆不是痴漢」
墨法集要			世俗見放詩有「魚膠熟萬許」之句、便謂須用魚膠。痴漢面前難以說夢。又、貨墨者、無一人肯辨其非。詐言魚膠良是、由是人信為然。堪一笑也
大唐新語	3		仁輒怒焉、罵之曰「痴漢！」、克己俄遷吏部侍郎
朝野僉載	4		唐鄭愔嘗罵選人為「痴漢」
鶴齋針	3		飛鴻道「你放心。有酒不飲是痴漢。有花不采是呆人。」
繪圖第一奇女	10		「有多少紅顏秀女陪痴漢、有多少美貌郎君伴醜妻。」
五燈會元	4		源曰「咄！痴漢、誰在井中？」
增廣賢文			饒人不是痴漢、痴漢不会饒人。
增廣昔時賢文			饒人不是痴漢、痴漢不会饒人。
名賢集			乖漢騙痴漢、痴漢總不和、乖漢做騙子、卻被痴漢騎
鹿樵紀聞			饒曰「痴漢、不斷吾頭、吉服何為？」
夷堅丙志			又為吾崇何也、笑曰「吾豈痴漢耶、如許高堂大屋、舍之而去、乃顧一小廟哉、饒氏愈益沮畏、訖子婦死、鬼始謝去、一家為之衰替雲」
指月錄	2		法性本來空寂、不為生死所絆、若欲斷除煩惱、此是無明痴漢。煩惱即是菩提。何用別求禪觀。實際無仏無魔
	11		源曰「咄痴漢。誰在井中。（後略）」
	32		然後下合頭語「以為奇特。痴漢不可瞞肩努眼時便有禪。不瞞肩努眼時便無禪也。（後略）」
袁州仰山慧寂禪師語錄			耽源云「咄、痴漢、誰在井中。（後略）」
揚岐方和尚語錄			上堂、寅朝清旦古今總見、更問如何、也是痴漢
法演禪師語錄			上堂云「六祖能大師、是箇大痴漢後代兒孫多、展轉生惑亂、子細好思量、白雲不著便」
			上堂云「舉則公案、事事成辨、向外馳求、痴漢痴漢」
密菴和尚語錄			千人萬人、羅籠不住、正是十字街頭、痴漢見解、大丈夫漢
宏智禪師廣錄			僧云「恁麼則遷去也」、師云「痴漢著甚危急」
仏果圓悟禪師碧巖錄			耽源曰「咄、痴漢、誰在井中、仰山不契、後問滄山、山乃呼慧寂、山應諾」
景德伝燈錄			源曰「咄痴漢誰在井中」
			法性本來空寂、不為生死所絆、若欲斷除煩惱、此是無明痴漢、煩惱即是菩提
資行鈔			摩訶羅即愚痴比丘云云、愚痴漢語也。
仏光國師語錄			難与痴漢說、点眼如廬陵米飴

固有名詞が頻出すること、さらには女性の魅力に惑わされる男性の話が多く見られることも、併せて指摘しておこう。ともあれ、以上の用例から、少なくとも「痴漢」という語が、唐代以降、一般的に使用されていた罵倒口語（俗語）であったということがうかがえる。ただし、文字化され、書物上に多く見られるようになるのは、明・清時代に作られた禅語録や白話小説類においてである。通常「文言」や「雅語」で書かれることの多い正史や漢詩に「痴漢」という語が全くと言っていいほど見いだせないのは、そのためであろう。

「痴漢」、日本へ

中国で生まれた「痴漢」という語が日本に入ってきて、広く使われるようになるのは、一七世紀以降、つまり江戸前期から中期にかけてのことである。主なルートは三つある。一つは、長崎で唐通事をしていた者や京都にある万福寺の禅僧たちなど、当時の中国話者からのルートである。だが、これはかなり限定的で、閉鎖的なものであったと考えられるので、「痴漢」の日本移入の契機にはなったものの、その流布と定着という点では、残り二つのルートに比べ、大きな役割を果たしたとは言い難い。「痴漢」という語の移入に大きな影響を与えたのは、残りの二ルートである。一つは、荻生徂徠や伊藤仁斎などの儒学者たちによるもの。もう一つは、戯作者、随筆作者たちによるもの、である。白話小説は、徂徠や仁斎など、当時の儒学者たちの学問の対象であった。そのテキストとしてもっとも好まれたのが、『水滸伝』であった。先に見たように『水滸伝』には四か所に「痴漢」という語が登場する。また他の白話小説にも「痴漢」という語が使われた。当時の日本人にとって「痴漢」という語はまったく新しい単語だったのである。新しい単語が大量に入ってきて来ると、当然、その意味や発音が問題となる。とりわけ徂徠や仁斎は当時の中国語の発音でものを考えようとした人たちである。そこで作られたのが「唐話辞書」と呼ばれる一群の辞書類であった。そこには語彙や発音などが簡潔に記されている。そうした例を具体的に見てみよう。

当時もつとも流布した唐話教科書に『唐話纂要』(一七一六〈享保元〉年刊)という書物がある。その巻三に「トウスイイバンツツハアン都是一般痴漢 スベテ皆 同シヤウノ。タハケモノ」とある。ここから、当時「痴漢」は「ツウハアン」と発音されてきたこと、そしてその意味は「タハケモノ」であったこと、がわかる。⁽¹⁵⁾これに倣った書、『唐話為文箋』(刊年等未詳)にも同様の記述がある。⁽¹⁶⁾他方、伊澤長秀(蟠龍)『漢字和訓』(一七一八〈享保三〉年刊)には「ワロカナルフクト痴漢子」とあり、この用例が唐代の宮廷風俗を書き記した『開元天宝遺事』からのものであることがわかる。⁽¹⁷⁾

こうした中でもとりわけ興味深いのが、唐話辞書の白眉とも称される『俗語解(長澤本)』(一七八二〈天明二〉年以降の成立)第一〇集に載る記述である。

俗語ニ痴の字ヲ使フ事、只アホウナルコトノミニ非ス。多クハ色欲ニ心ノ迷フコトニ用ユ。痴情トイヘハ色情ナリ。又色痴ナト、モ云。婦人ノアマエルヲ散痴散嬌ト云。又色ニ迷男ヲ痴心漢ナト、云ニテ知ヘシ。⁽¹⁸⁾

つまり、俗語に「痴」という字を用いた場合、単に「阿呆」とか「馬鹿者」とかいった意味だけではなく、多くの場合、「色欲」に心が迷った状態をも含んでいるのだ、とこの本の著者は言っているのである。ここには色に迷った男を「痴心漢」と呼ぶと書かれているが、これは現代の「痴漢」意味にかなり近いものと言えるだろう。現段階では、他に同様の記述を見出すことができないこと、それにこうした辞書類には秘伝的な要素を持つものも多く存在すること、などから判断すれば、『俗語解』のような解釈は一般的なものではなかった可能性もある。ただし、一八世紀後期に、こうした言説があるという事実は留意しておいたほうがいいだろう。なぜなら、現在の「痴漢」の意味となるような素地が、一八世紀にはすでにあったと言えるからである。

戯作への応用

学問の対象ともなった「痴漢」であるが、その後様々な方面で使われるようになった。とりわけ多かったのが、戯作と随筆である。『水滸伝』をはじめとする白話小説は、儒学者たちの学問の対象だけにとどまるものではなかった。当時の戯作者たちにも大きな衝撃を与えた。その結果、白話小説で使用された「痴漢」という語も、新しい言葉として戯作に登場するようになったのである。

早いものとして、平賀源内の戯作、『放屁論』（二七七四〈安永三〉年刊）が挙げられよう。『放屁論』は「人參吞ラジシんで、縊る痴漢クハケあれバ、河豚汁喰ふて長寿する男もあり。」という一文で始まる。ただし、『放屁論』における「痴漢」の読みは「たはけ」となっている。⁽²⁰⁾

源内に師事した蘭学者で戯作者でもあった森島中良（下界隠士・天竺老人）が『ぬけがら青大通』（二七八一年刊）で「痴漢」という語を使っている。

扱たくハおれが口先にハ楯突者たつくものこそ無なかりけると仕たり顔かほする痴漢共、知恵ハ三文蕃椒とうからしの袋より狭せはく高慢かうまんの高きこと前引まへひきの月躰おどりはそこ退ひの、（後略）⁽²¹⁾

「痴漢」には「べらぼう」というルビがふられている。ここは、通ぶった者たちをけなしている場面である。他にも、同時期の作品では、作者は未詳ながら一七八六（天明六）年の序を持つ伝記、『皇和世説新語』『儉齋篇』の「三荘大夫」に「痴漢」という語が見える。

先に見た『日本国語大辞典（第二版）』にも挙げられていた山東京伝の『繁千話』は一七九〇（寛政二）年の跋をもつ本である。この本は人気があったので、同内容だが異表記のものが数種存在することが知られている。「調唇弄

舌をまじえてちかんのごとくとりあつかふから、ぐっとかけだしさ」という平仮名表記の本もあれば、「調唇弄舌をまじえて痴漢のごとくとりあつかふからぐつとかけだしさ」と、「調唇弄舌」の右に「てうしんろうせつ」、左訓に「シヤベル」を付し、かつ「痴漢」の右部分に「ちかん」、左訓に「アホウ」という文字を付している本もある。どちらが古いものかわからないが、「ちかん」という訓のない本は今のところ見つからない。こうしたことから判断すると、現時点では、この本が「痴漢」という漢字を「ちかん」と読ませた日本で初めてで、確実な用例とせざるを得ないようである。

一七世紀後半に入ってきた「痴漢」という語（正確に言えば漢字）が、一八世紀の後半に「戯作」という媒体で使われ、それが次第に広まっていった。読みは様々であったが、「おろかな男」を「痴漢」という漢字で表記することが当時の流行であり、視覚的にも聴覚的にも新規性を帯びた言葉として認識、受容され、次第に流布していった可能性がある。

馬琴の「痴漢」

曲亭（滝沢）馬琴の作品には、「痴漢」の用例を複数見出すことができる。『水滸伝』が馬琴に与えた影響の大きさについては、従来から縷々指摘されているところである。馬琴に限らず、一八世紀から二〇世紀にかけて、つまり江戸から明治にかけて『水滸伝』は日本に多大な影響を与えた。『水滸伝』の影響をもっとも受けたと思われる馬琴の本には多くの用例を見つけることができる。明治時代以降もよく読まれた日本語版『水滸伝』、『新編水滸画伝』は当然として、『新編金瓶梅』、『近世説美少年録』などでも「痴漢」という言葉を使っている。中にはタイトルに「痴漢」を入れた作品まである。『押絵鳥痴漢高名』（一七九七〔寛政九〕年序）がそれである。ここでは「痴漢」を「あほう」と読ませている。

少し話はずれるが、『水滸伝』に見える「駿馬却駄痴漢走」という言葉は非常に有名なものだった。『金瓶梅』など多くの書にその例が見える。嶋村東洋編『最新問答全書』附・最近八年間官立諸学校入学試験問題・漢文』という明治の受験対策本があるが、そこに「駿馬駄痴漢走とは如何」という質問と、それに対する答えが記されている。回答は次のようなものだ。

唐寅詩に駿馬每駄痴漢走。巧妻常伴拙夫眠と。駿馬は好き乗人を乗せて走れば善きも、馬を御する方も知らざる痴人を乗せて走ること屢々なり。畢竟薄命の意味を比喻せしならん。²⁵⁾

この本は官立学校の漢文入試問題対策本である。したがってこの言葉は、明治の末においても試験問題に出るくらい有名な言葉だったことがうかがえる。そのため明治時代の小説や随筆など（たとえば横井夜雨「春」など）でもしばしば使われていたり、一八九九年一月二五日発行の『女学雑誌』第五〇〇号（女学雑誌社）には「痴漢駿馬に跨り、佳人醜夫に倚る」と題する文章が掲載されたりしているのが確認できる。そこには美人の夫は大抵醜い男子だという旨の記述がある。引用文中に見える『唐寅詩』とは、明代に活躍した唐寅（字は伯虎）という人の詩集のことである。この人は庚寅年寅月寅日寅生まれなので「唐寅」と名乗っていたようだ。ただ、現在のところ『唐寅詩』にその例を見出すことはできない。ただ、先にも紹介したが、『五雜俎』の巻一六に「近時唐伯虎亦有詩云、『駿馬每駄痴漢走、巧妻常伴拙夫眠。世間多少不平事、不会作天莫作天。』雖謔詞、亦有激之言也。」とあるので、もとは唐寅の詩にそのようなものがあつたのかもしれない。²⁶⁾

『五雜俎』にはもう一カ所「痴漢」の用例があるが、これも巻一六で、「紹興末、朝士多饒州人。或謂之曰、『諸公皆不是痴漢』。又有監司薦人、以閑節欲与饒州人。或規其當先孤寒、監司憤然曰、『得饒人処且饒人。』」とある。こちらは、どうやら『増広賢文』や『増広昔時賢文』などの成句集に採られたようだ。

本題に戻ろう。先に挙げた山東京伝の（馬琴は京伝の門人だった）の洒落本『繁千話』のほかに、タイトルに「痴漢」という文字を用いた書物もいくつか存在する。馬琴の『押絵鳥痴漢高名』もその一例であるが、その他にも一八〇六（文化三）年の跋をもつ感和亭鬼武『痴漢三人伝』という本が例として挙げられる。この本における「痴漢」には、一貫して「ばか」というルビがふられている。感和亭鬼武は、本名を倉橋羅一郎といい、馬琴の弟子だった男である。彼の断本には『白痴聞集』という『白氏文集』をもじったものがあつたりするので、こうした愚かな人間を描くのが得意だったようだ。

ともあれ、『水滸伝』の影響を受けた戯作者たちが、「痴漢」という語を多用していることは注目しておいていいだろう。彼らは「痴漢」をそのまま「ちかん」と読ませたり（この場合、右ルビとして用いる）、ルビや左訓に「ばか」「アホウ」など様々な読みを提示したりしている。

野呂松人形

「痴漢」という語は戯作だけでなく、芸談、芸評、種々の評判記、随筆など、広い範囲で用いられたようである。現在確認できるもっとも早いものとして、一七五六（宝暦六）年に刊行された浪速散人一楽（一楽子）『竹豊故事』（二七五六年〈宝暦六〉刊）の用例を挙げることができる。「操人形之故事並名人之遣手付古今達人之事」という段に「其比の人、愚かに鈍き者を賤しめ、のろまと云異名を付、痴漢ニ比したり。此野呂松氏を祖とし、京大坂の操芝居ニ野呂間・鹿呂間・鹿呂七・表間等と名を付、道外たる詞色をなし、浄るり段物の間の狂言をなしたり。」（七丁裏八丁表）とある。この段は、浄瑠璃の間狂言として人氣のあった「野呂松（間）人形」（図1）の起源について述べた箇所である。「野呂松人形」は江戸初期の道化人形の遣い手、野呂松勘兵衛に由来するという。勘兵衛は、頭が平たく頬が高く唇が突き出っていて、チョビ髭をはやした卑しげな人形を遣うところから「野呂松」という名が付

いたようだ。⁽²⁸⁾

ここでは「痴漢」を「あほう」と読ませている。「のろま」の語源もこの「野呂松人形」であり、この愚かな動きが後に「愚鈍」を意味する「のろま」という語になるのである。芥川龍之介の作品に「野呂松人形」（初出は一九一六年、雑誌『人文』、樗牛会）というのがあるから、かなり長い間人気があった出し物だったのだろう。この「野呂松」に関する記事に、「痴漢」がよく登場する。たとえば、一七三四年に刊行された菊岡沾涼『本朝世事談綺』三「態芸門」には「鈍をいやしめてのろまといひ、痴漢あほうに比したり」とある。同様の記事は一七九〇年頃成立したと思われる『操曲入門口伝之巻』などにも見られるものである。⁽²⁹⁾



図1 野呂松人形

(山田徳兵衛編『図説日本の人形史』p. 37より転載：左は『絵文匣』〈1722刊〉、右は『江都二色』〈1733刊〉より)

三馬親子の「痴漢」

式亭三馬、またその子、小三馬も「痴漢」という語をよく使った人であった。まずは三馬の方から見ていこう。三馬は一八一二（文化九）年に刊行された『忠臣蔵偏痴氣論初稿』と、同年の序を持つ『古今百馬鹿』において「痴漢」という語を用いている。前者では、「大星めが糞痴漢、惘てものが言れず。」と「たハけ」というルビを付けている。⁽³⁰⁾ 後者は、三馬の戯号に関わるもので、大変興味深いものである。

こゝに馬鹿の馬字を名のりて三馬といへるあり。（中略）三本足らぬ戯作者がお利口らしさを願れば、吾ながら吁馬鹿らしうざんず。⁽³¹⁾

自分の三馬の「馬」の字は「馬鹿」の「馬」だという。さらに、人間よりも毛が三本足りないという猿のような戯作者が、お利口ぶって書いてきたことを今さらながら顧みれば、自分のことながら非常に馬鹿らしいことだ、と三馬は言うのである。

ただし、三馬の戯号については棚橋正博が、

この戯号は、三馬が十八歳のある夜、三つの戯名を書いた紙片を捨り、その捨り紙を放って捨てたものを開けてみれば、歌舞伎の式三番（顔見世興行や正月興行でする所作事）をもじった「式亭三馬」とあったことに由来するという。「式亭三馬」の思いつきは、物売りの声「三番叟南京売操り」からと、歌舞伎の芝居好きが影響して紙片に書いたものであったろう。馬琴が『近世物之本江戸作者部類』で式亭三馬の戯名は唐来参和と烏亭焉馬に由来すると書いたものだから、こんにちでも、そのように解釈する向きがあるが間違いである。⁽³²⁾

としているので、『古今百馬鹿』の説をそのまま採るわけにはいかないが、理由は一つではないかもしれないし、この序文も今後の参考になるかもしれないと考え、ここに掲出した次第である。

戯号の他にも、興味深いことがある。それは表紙にも「痴漢」の語が見えることだ(図2)。表紙の絵の部分に「駿馬每駄痴漢走巧妻常伴拙夫眠」という字が見える。この字句が『水滸伝』『金瓶梅』などの書に縷々見られることは先に指摘した通りである。この絵には、いかにも間抜けそうな相貌をした男と女性二人の計三人が描かれている。よく見ると男の鼻には手綱が付けられおり、男が女性二人に操られている様子が描かれている。

三馬も中国の白話小説の影響を受けていただけではなく、平賀源内や森島中良を大変尊敬していたようなので、彼が「痴漢」という語を使った理由の一つに源内たちからの影響というのもあったのかもしれない。

三馬の代表作『浮世床』初編(二八一三年刊)巻之下「後叙」にも「ヤイ三馬の大痴漢」という例が見られたり、巻之中(一八一三年刊)では「痴」、一字で「たハけ」と読ませている例も見受けられたりする。おそらく三馬だけではなく、他の戯作者も、「痴」という一字で「たわけ」と読ませるようなことが、当時はたくさんあったのだろう。

小三馬は三馬の一人息子である。名を虎之助といい、三馬の死後、



図2 式亭三馬『古今百馬鹿』表紙(早稲田大学西垣文庫)

小三馬と名乗った。一八四六（弘化三）年の序をもつ『戯作花赤本世界』上巻の序文には、「痴漢ハ各位御存といひつゞくれバ序文中、凡例ならで五湖を的なる戯口も向ふ水に棹さす硯の海に（後略）」とあり、小三馬も三馬と同じく自分を「痴漢」である、と言っている。ただし、小三馬は「痴漢」を「たわけ」と読ませている。通常、「たわけ」という語は、自分に対して使わない語といわれる。つまり「俺は馬鹿だ」とは言っても「俺はたわけだ」とは言わないというのだ。この部分は、小三馬自身が自分のことを「たわけ」と呼んではいないものの、この部分では読者など、他人から見て自分は「たわけ」だと卑下して言っているのだ、通例に従った使い方だと判断していいだろう。

以上、平賀源内から森島中良、曲亭馬琴、式亭三馬など江戸時代を代表する戯作者たちが、作品中、あるいはその序文において「痴漢」という語を使っていた。読みは「たわけ」が多いが中には「ちかん」と読ませているものもあった。戯作が大衆的な文芸であり、多くの庶民に読まれたということは、今更説明するまでもないだろう。つまり「痴漢」という語と意味は戯作を通して、多くの人の目にとまるようになり、着実に広まっていったものと考えられるのである。

随筆類における「痴漢」

「痴漢」は戯作だけではなく、随筆にも使われたようだ。それを以下、例を挙げながら見ていこうと思う。小宮山楓軒『懷宝日礼』三（一八一二（文化九）年）に次のような記事がある。

○山本信有、病中ニ画人文晁、武清兩人ニ託シテ、己レガ像ヲ作ラシム。云ク、予ハ文武両全ノ人ナリ。其意ヲ画クベシト。武清ガ図ニ、小具足シテ床几ニ抛リ、鎗ヲ横タヘ、其旁ニハ書籍散乱シテアルヲ画ケリトゾ。痴漢笑フベシ。信有。去月死。

山本信有（北山・江戸中期、「折衷派」の儒学者）が病気になった。信有は、絵師の谷文晁と喜多武清にたくして自画像を描かせた。信有は、自分は文武両道の完全な人であるから、それがわかるように描けと申しつけた。それを聞いた武清は、信有が小具足を付けた姿で、床几に抛りかかり、横に槍を置き、その周りには書籍が散乱している様を描いた。そのほかばかしさにはあきれて笑うしかない、と楓軒は言うのだ。同書の別の箇所には、武清がこの絵を版行して売り出した旨のことが記されている。

○武清北山ノ肖像ヲ印刻シテ、三百銭ニ売ル、北山門人怒リテ、其板ヲ奪ヒ絶交ス。

武清は、信有の肖像画を信有の断りもなく販売したようで、それに対し怒った信有の門人たちはその版木を奪って、武清らの一派と絶交した、という。

一九世紀の代表的な随筆集の一つ、松浦静山『甲子夜話』（一八二八年起筆）の巻一八にも「痴漢」という語が使われている。

又、平戸大垣と云る村に痴漢あり。常に被髮弊衣、その体汚穢云ばかりなし。たゞ淫乱甚しく、婦女の採薪に往者を見れば、逐てこれに迫り犯んとす。婦女懼れて逃去る。

平戸の大垣（現在の長崎県平戸市）に「痴漢」がいた。いつも髪が衣を覆い、体は非常に汚れていた。その男は淫欲が激しく、女性たちが薪を採りに行くのを見れば、追いかけて女性に迫って犯そうとする。だから女性たちはその男を恐れて逃げ去るのだ、という内容である。

こうした例から推察すると、「痴漢」の中には性的異常者が含まれていたことがわかる。もちろん単に「おろかな男」

という意味で使われ場合もあるが、その中には性的異常者も含まれていたのである。同書の三篇卷之一六にも「抑又、痴漢と誹笑せん邪」という一節が見えるが、これは「ヤハタ不知の森」という恐ろしい森についての顛末を書きとめた箇所に見られる用例である。

一八二九(文政一二)年の自序をもつ塵哉翁『巷街贅説』卷之二の「傲顔見世番附小伝」の文中に「予も亦痴漢の数に入れて、乞見て爰に写し、後の笑草とはなしぬ」という例が見られる。『巷街贅説』は江戸の見聞記である。この文章は「小伝」という女義太夫についての話である。ここで小伝は、「姪婦」と呼ばれている。戯場役者秀佳(三代目・坂東三津五郎とある)の妻だったにもかかわらず、多くの男性と関係をもち、それを隠そうともしなかったため、江戸ではずいぶん大きな噂になっていたようだ。小伝と関係をもった男を誰かが顔見世の入代り番付に似せ、番付を作った。それを歌川国貞が写して版行したが、すぐに発禁処分をくらってしまった。「塵哉翁」と名乗るこの本の筆者は、どうやら歌川国貞の判じ物を持っていたようで、それをこの書に写したらしい。その行為について自ら論じたのが先に引用した部分である。自分も国貞らがしたことや、それを買って喜んだ人たちと同じ「痴漢」の中の一人であり、それをここに写して後世の笑い草にしようと思う、と書いているのだ。

『巷街贅説』が書かれた時期は、多くの江戸風俗を写した書物が出版された時期でもあった。寺門静軒『江戸繁盛記』(一八三二—一八三六年刊)もその一つである。この書は江戸の繁栄ぶりを「狂体漢文」で記したものであるが、刊行後、発禁処分を受けた書でもある。その五篇一八丁表(深川の断)に「題以窮鬼、目以痴漢(題スルニ窮鬼ヲ以テシ、目スルニ痴漢ヲ以テス—訓読筆者)」という語がある。ここにも「痴漢」という語が含まれている。ちなみに、ここはある娼妓の回想場面であるが、「痴漢」という文字にルビはふられていない。おそらくそのまま「ちかん」と読むのであろう。

当時の「痴漢」の読みは様々である。どうやら文章の流れやリズム、内容などによって使い分けられているようだ。それよりも、ここでもっとも重要なことは、日本では「痴漢」という語が、口語(話し言葉)ではなく、むしろ文章語

〔書き言葉〕として認識され、使用された、ということである。先に見たように中国において「痴漢」は、あくまでも「話し言葉」、つまり「口語」であり、「俗語」であった。しかしながら、日本では戯作、随筆などにおいて、「書き言葉」、つまり「文言」としても使用された。この点が、中国とは大きく異なる点であり、これがやがて、両国における近代以降の「痴漢」の運命に、大きな影響を与えることになるのである。

魯西亜と「痴漢」

少し変わったところに、「痴漢」が登場する。それはロシア語の辞典である。一八一四（文化一一）年の写本で、庵支離子（古賀侗庵）編『俄羅斯紀聞』がそれだ。そこには、「トラカ」の訳語が「痴漢」となっている。⁽¹⁾ 現在でもロシア語の中に残っている。たとえば、『露和对訳現代ロシア話ことば辞典』（新時代社）には「Дурпак」（カナ表記では「ドラーク」に近い）の項に「ばか者」などの用例が多数載っている。この語は元来、「男根」を意味する言葉であるが、罵倒する時には「バカ」という意味になるようだ。⁽²⁾ 念のためもう一つ辞典を調べてみよう。「コナイス露和辞典（第四版）」の「Дурпак」の項には、「①《口》ばか者、あほう、②《史》十八世紀の宮廷の道化者、③《魔》白痴、④カルタ遊びの一種」と四つの意味が載っている。⁽³⁾ どうやら現代のロシアで、「Дурпак」は口語として用いられているようだ。おそらく『俄羅斯紀聞』が書かれた一九世紀も同じであったと推察される。

『俄羅斯紀聞』は日本で書かれた露和辞書であった。この辞書とはほぼ同時期にロシアで書かれた露和辞典もロシアに現存している。日本に漂流したゴンザという人物が書きのこしたものだ。ゴンザは教種類の露和辞書を作っているが、その中に『新ストラヴ日本語辞典』がある。そこには「Дурпак」の日本語訳として「馬鹿者」とある。⁽⁴⁾ ロシア語には「Дурпа（カナ表記すると「ドラー」に近い音になる）」という語もある。これは「馬鹿女」を意味するようだ。どうやら「Дурпак」や「Дурпа」の意味や用法は、『俄羅斯紀聞』が書かれた一九世紀から現在までそ

れほど変わっていないようだ。⁶

ちなみに、『トルストイ民話集』などで有名な「イワンの馬鹿」というキャラクターはロシア語で「Иван Дурак」と呼ぶ。ここにも「Дурак」という語が活かされている。

ともあれ、日本の江戸時代にロシアで使われていた語が江戸の書物にも書きとめられ、それが現在のロシアでも同じ意味で使われていることが、以上の例から確認できるのである。

だが、どうしてこの時代にロシア語辞典を編む必要があったのだろうか。このあたりの事情については、アニック・ホリウチ「近世日本の知のネットワーク―露西亜(ロシア)―関連の言説を通して―」という論考に詳しいが、それによると蝦夷地の開拓と、二度にわたるロシア使節団の到来が大きかったようである。こうした動きに対し、当時の江戸幕府がロシアの植民地政策を警戒し、また通商を迫られたこともあって、蘭学者が情報収集と会話面での中心的な役割を果たした。⁶

伺庵もロシアに大変興味と危機感を抱いていた一人であった。彼は後に『海防臆測』という書で海防、とくにロシアへの備えについて、自らの考えを開陳している。当時の蘭学者たちは、オランダ語、もしくはオランダからだけではなく、ロシア語を学び、ロシア語を通して海外情報を収集したものと思われる。『俄羅斯紀聞』を見ればわかるように、その語彙量、情報量は大変なものである。少なくとも、彼らは日本で「痴漢」に当たる語がロシア語の「トラカ」に当たるということを知っていたのだ。

おわりに

「痴漢」という語は中国で生まれた言葉である。七世紀の『北史』が現在のところもっとも古い用例であるが、それ以前から使われていた可能性もある。ただし、それは口語であったため、書物上に表れることはあまりなかったも

のと考えられる。それが、明・清時代、白話小説の盛行に伴い文字化されるようになる。あるいは禅僧の問答集や語録集として残されるようになった。口語であったためか、現在の中国には「痴漢」という語は残っていない。

中国の白話小説が一八世紀に日本へ大量に入ってきた、学問の対象となった。江戸では主に叢園塾を中心とした荻生徂徠の一派、そして京では古義堂を中心とした伊藤仁斎の一派が古文辞学、古義学といった学問を提唱し、そのテキストとして中国の白話小説を使用した。とりわけ『水滸伝』はその好材料となった。学問の領域だけではなく、戯作にも白話小説は大きな影響を与えた。平賀源内をはじめとし、山東京伝、感和亭鬼武、曲亭馬琴といった人たちが「痴漢」という語を好んで使った。読みは、音読みの「ちかん」と読む場合もあったが、本来は意味であるはずの「あほう」「たわけ」など、様々な読みがなされ、本文中だけでなく、書名や目録などにも使われた。戯作だけではなく、「痴漢」は書き言葉として随筆など種々の書物に採用された。中国ではあくまで口語であった「痴漢」はいつの間にか使われなくなったようだ。だが、主に書き言葉として認識され、使用された日本では明治時代以降も新聞や小説などで「痴漢」という語が使われた。さらに、元来は、「おろかな男」という意味の方が強かった「痴漢」という語は、やがて「女性にみだらないたずらをする男」という性的な意味を帯び、さらには後者の意味の方が優勢になっていくのである。

ちなみに、現代韓国語にも「痴漢(치한: Chihan)」という語がある。この語も元来は中国語であり、意味も「おろかな男」であった。それが近代になって日本と同様に、「女性にみだらないたずらをする男」という意味が付け加わったようだ。朝鮮半島で、「痴漢」という語がどのような変容を遂げたのかという点も大変興味深い問題であるが、これについてはまた稿を改めて論じるつもりである。

今後は、本稿で行ったような語彙的な変化だけではなく、「痴漢」という現象について、様々な観点から分析と考察を行っていく予定である。

註

- (1) 井上章一 & 関西性欲研究会編『性の用語集』、講談社現代新書、二〇〇四年二月、三五七〜三五八頁。
- (2) 原武史『鉄道ひとつばなし』、講談社現代新書、二〇〇三年九月、二二〇〜二二二頁。
- (3) 小松奎文編著『いろの辞典(改訂版)』、文芸社、二〇〇二年六月新装版、五四〇頁。
- (4) このほかにも堀井光俊『女性専用車両の社会学』(秀明出版会、二〇〇九年一月)において「痴漢」の語義などを検討しようとする姿勢は見られるものの(第一章序論「痴漢という言葉」、三四〜三九頁)、深い考察はなされておらず、その内容も先行研究を超えるものではない。
- (5) 拙稿『「痴漢」の文化史―「痴漢」から「チカン」へ』『日本研究』第四九集、国際日本文化研究センター、二〇一三年三月。
- (6) 田口真二・平伸二・池田稔・桐生正幸編著『性犯罪の行動科学―発生と再発の抑制に向けた学際的アプローチ』(北大路書房、二〇一〇年九月)や北折充隆『迷惑行為はなぜなくなるのか?―「迷惑学」から見た日本社会』(光文社新書、二〇一三年一〇月)、など。
- (7) 井上俊ほか編『セクシュアリティの社会学』(岩波講座 現代社会学 第一〇巻)、岩波書店、一九九六年二月、など。
- (8) 榎透・岩切大地・大江一平・大林啓吾・守谷賢輔『時事法学―法からみる社会問題』、北樹出版、二〇〇九年一〇月、など。
- (9) 瀬田英一『痴漢の生態とその防止法―他4編』、武田出版、二〇〇二年三月。
- (10) 井上章一・斎藤光・澁谷知美・三橋順子編『性的なことば』、講談社現代新書、二〇一〇年一月。
- (11) 井上章一編『性欲の文化史I』、講談社メチエ、二〇〇八年一〇月。同編『性欲の文化史II』、講談社メチエ、二〇〇八年一月。
- (12) 井上章一編『性欲の研究―エロティック・アジア』、平凡社、二〇一三年五月。
- (13) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典(第二版)』第八卷、小学館、二〇〇一年八月、一三一一頁。
- (14) ちなみに寛政二(一七九〇)年の跋をもつ早稲田大学蔵本『繁千話』には「痴漢」という文字の右側に「ちかん」、左側に「チカン」というルビがふつてある。

- (15) 『唐話辞書類集』第六集、汲古書院、一九七二年一月、一一〇頁。
- (16) 『唐話辞書類集』第二集、汲古書院、一九七〇年五月、五〇六頁。
- (17) 『唐話辞書類集』第一六集、汲古書院、一九七四年四月、一〇四頁。
- (18) 石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』、弘文堂書房、一九四〇年一〇月、一五三―一五四頁。
- (19) 『唐話辞書類集』第一〇集、汲古書院、一九七二年一〇月、一一四頁。読みやすさを考慮し適宜句読点を加えた。
- (20) 風来山人(平賀源内)編『風来六々部集(前篇)』、四丁裏。ちなみに、この一節は三文字屋金平「偽文学者経」『文学者になる法』(宮澤俊三、一八九四年四月)に「人參呑んで首縊らんとする白痴漢ものよ」として転用されている。
- (21) 下界陰土『ぬげから青大通』、刊行年等未詳、三丁表。長い間、この書の作者は平賀源内であるとされてきたが、林若樹、森銃三、三田村篤魚、暉峻康隆らによって、森中良の作ということが明らかにされ、現在はこれが定説となっている。このあたりの事情も含め、この書物については、石上敏『蛇蛻青大通』論―森島中良における「洒落本」―(『文学・語学』第一四〇号、全国大学国語国文学会、一九九四年三月)に詳しい。
- (22) 早稲田大学蔵、宮川曼魚旧蔵本。
- (23) たとえば、高島俊男『水滸伝と日本人』(大修館書店、一九九一年二月)や『アジア遊学』一三二号(水滸伝の衝撃―東アジアにおける言語接触と文化受容)、勉強出版、二〇一〇年四月)などを参照されたい。
- (24) 『金瓶梅』については従来、『水滸伝』や『三国志』、『西遊記』に比べ、直接的な資料が少ないため江戸時代の文化や文学に大きな影響を与えることはなかったとされてきたが、川島優子「江戸時代の『金瓶梅』の受容(1)―辞書、随筆、洒落本を中心として―」(『龍谷紀要』第三二巻大一号、龍谷大学、二〇一〇年九月)によって、『金瓶梅』も学問の対象とされていたこと、またこれまで言われていた以上に受容されていたことが明らかになっている。
- (25) 嶋村東洋編『最新問答全書』附・最近八年間官立諸学校入学試験問題・漢文』、修学堂書店、一九〇八年四月、六八―六九頁。返り点などは省略した。また読みやすさを考慮し、句読点を補った。
- (26) これを謝在抗のものとする説も多く見られるが、いずれも明確な出典は示されていない。
- (27) 日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典(簡約版)』、岩波書店、一九八六年一二月、四四六頁。
- (28) 大曾根章介・堀内秀晃・森川昭・檜谷昭彦編『日本古典文学大事典』、明治書院、一九九八年六月、九七九頁。

- (29) 『操曲入門口伝之巻』の内容や意義については、細田明宏編『二〇世紀における人形浄瑠璃の総合的研究』(二〇〇八) 一一年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書、二〇一二年三月)が詳しいので参照されたい。
- (30) 式亭三馬編『忠臣蔵偏痴氣論初稿』、雙鶴堂、一八一一年六月序、題巻首一丁裏。
- (31) 式亭三馬『古今百馬鹿』上巻、一八一二年九月序、首巻序一丁裏、序二丁表。
- (32) 三馬の筆押は「くくり猿」というものでこれは「意馬心猿」という語に由来するという(徳亭三孝『客者評判記』(一八一一年刊)跋文)。「意馬心猿」とは、走り回る馬や、騒ぎ立てる野猿のように落ち着かない様子に由来する語で、煩惱や迷いによって心が落ち着かないことのとたとえてある。
- (33) 棚橋正博『江戸に花開いた「戯作」文学』、NHK出版、二〇一三年一月、一〇五〜一〇六頁。
- (34) 式亭三馬『浮世床』初編巻之下「後叙」、鶴屋金助・粕屋半蔵、一八一四年春、下四九丁裏。
- (35) 同前、巻之中、下二〇丁表。「痴」一文字で「たわけ」と読ませる例(アノくそ痴めが、うぬ。)が三馬作『酩酊気質』(一八一三年正月、津村三郎兵衛・西宮平兵衛・石渡利助、一八一三年正月)に見える。
- (36) 松本修『全国アホ・バカ分布考』、新潮文庫、一九九六年二月、一〇八〜一二〇頁。
- (37) 森銃三ほか編『随筆百花苑』第三巻、中央公論社、一九八〇年二月、五三頁。
- (38) 松浦静山著、中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話1』、東洋文庫、一九七七年四月、三一九頁。『甲子夜話・三篇』巻之一六にも「痴漢」の用例がある。
- (39) 同『甲子夜話三篇2』、東洋文庫、一九八二年二月、四一〜四二頁。
- (40) 森銃三・北川博邦監修『続日本随筆大成』別巻(近世風俗見聞集・九)、吉川弘文館、一九八三年二月、一四二頁。
- (41) 庵支離子(古賀何庵)編『俄羅斯紀聞』第一集第二冊。
- (42) 狩野亨・K・メドベエトキン編『露和对訳現代ロシア話しことば辞典』、新時代社、二〇〇〇年三月、一五五〜一五六頁。
- (43) 井桁貞敏編『コンサイス露和辞典(第四版)』、三省堂、一九九八年一〇月、一九六頁。
- (44) 村山七郎編『新スラヴ日本語辞典(日本版)』、ナウカ、一九八五年五月、一〇三頁。
- (45) 前掲『コンサイス露和辞典(第四版)』、一九六頁。ただし、「①ばか女、②あほう(罵語として男にも)」と書かれている。強く罵る場合には、男に対しても用いるようである。

(46) アニック・ホリグチ「近世日本の知のネットワーク―『魯西亜(ロシア)』関連の言説を通して―」『比較日本学教育研究センター研究年報』第五号、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター、二〇〇九年三月。他に、江戸時代の日本人のロシア観を知るには志水速雄『日本人のロシア・コンプレックス―その源流を探る』(中公新書、一九八四年一月)が参考になる。

〈キーワード〉痴漢、性犯罪、戯作、白話小説、唐話

The Introduction and Modification of the word “Chikan” in China and Japan

Shigeki IWAI

This paper aims to clarify the process that the word “Chikan(groper)” put into Japan. The word “Chikan” was born originally in China. The meaning was “a stupid man”. “Hokushi”, written in the 7th century, is considered to be the oldest example currently. This word was rare to be left as a letter because this word was the spoken language in China. However, it came to be become a letter in the novels described in the Ming and Qing dynasties, which are called “Hakuwa” novels in Japan.

These Chinese novels entered Japan in large quantities in the 18th century and became a target of the studies. “Suikoden” was the favorable factor among other things. As well as studies, these novels had a big influence on the “Gesaku”, which are fictional and comical novels in the Edo era. As well as in the “Gekaku”, the word, Chikan”, was used as the written language by various kinds of books including the essay.

As a result, the word disappeared because it was the spoken language in China, but this word still remains because it was mainly recognized as the written language in Japan, with the change of meaning from “a stupid man” to “a man who does sexual acts to women” after the Meiji era.